ヘミングウェイと猫と女たち

今村楯夫

新潮選書

「猫（キャット）」と呼ばれる女性がいた。そして、マストを肩に道に倒れた一人の老人の前を一匹の猫が通り過ぎて行った。また、ヘミングウェイのキー・ウエストの家にもキューバの邸宅にも、今なお50匹ほどの猫の末裔が住んでいる。小説では、ふと、さりげなく猫が姿を現したり、あるいは忽然と消え去ったりもする。一体、この「猫」たちは何なのだ。この謎めいた「猫」の存在を解明しながら、ヘミングウェイの実像と文学を明らかにしてみたい、そんな思いに駆り立てられて、この書が生まれた。　著者

ヘミングウェイと猫と女たち

〈新潮選書〉

一九九〇年二月一五日　印刷
一九九〇年二月二〇日　発行

著者　今村楯夫
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号　一六二
電話　業務部（03）二六六一五一一一
編集部　二六六一五四一一
振替　東京四―八〇八番

印刷　株式会社光邦
製本　株式会社大進堂

© Tateo Imamura 1990, Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-600375-9　C0398

価格はカバーに表示してあります

ヘンリー ハエイと猫と女たち

今村楯夫

新潮選書

ヘミングウェイと猫と女たち＊目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ　キー・ウエストへの旅　9
ケネディ国際空港にて
海に浮かぶ島々
ヘミングウェイの家

第一章　「母」の肖像　31
性悪女（ビッチ）の原型
母グレースのこだわり
母と子の闘い

第二章　猫（キャット）とは何者だ　52
最初の妻――ハドレーとの出会い
二番目の妻――ポーリンの出現
別れた妻と猫（キャット）

第三章　猫は猫であり猫ではない　81
『武器よさらば』の猫
『誰がために鐘は鳴る』のマリア

第四章　雨の中の猫　97
猫を見た女
『荒地』と『ユリシーズ』の影
大きな猫と小さな猫
妊娠か妊娠願望か
第五章　消えた猫　142
残された空間
『老人と海』の猫
異質なるものたち
第六章　ヘミングウェイと《宿命の女たち》　161
兵士の故郷
「妹なるもの」の存在
《宿命の女》の原型
「母なるもの」への憧憬
兄妹――その禁じられた世界
楽園喪失への弔鐘
両性具有への誘い

呪縛する髪
金髪（ブロンド）の女性たち
黒髪の少女
海と少年
エピローグ　ケネディ図書館を訪ねて　239
あとがき　249
ヘミングウェイ年譜　252

ヘミングウェイと猫と女たち

ンダの方へいい、ソファの前のテーブルに盆を置き）お義父さん。お義父さん。

真司　（はじめて反応し）ああ。

佳代子　寒いでしょう？　ベランダ。さあ、お茶、どうぞ。

真司　いや。（と老いた仕草で振りかえり）家の方は建て込んでいるからね、見下ろすのがいい気持なんだよ。（とガラス戸につかまり敷居をゆっくりまたぐ）

佳代子　ごめんなさい、戻るのがギリギリになって。（といいながら真司の動きに小さくドキリとする）

真司　こっちはまた早く来すぎた。（と笑いながらガラス戸を閉める）

佳代子　お待たせしてしまって。（と気持を隠してお茶の仕度）

真司　ハハ。（ちょっといたずらっぽく笑い）驚いた？　（と佳代子を指し自分を指す）

佳代子　は？

真司　急にバカに歳をとっちまった、驚いてる？　（老人らしくソファへ）

佳代子　アハ、いえ。どうぞ。

真司　正月に来て、まだ三月たってないもんね。

佳代子　御病気でも？

真司　いやいや。

佳代子　ギックリ腰？

真司　七十三だよ、佳代子さん。

佳代子　はい。

真司　なにもなくても、こんなもんさ。

プロローグ　キー・ウエストへの旅

今夜はとびきりいい晩（土曜日）です。もっとも、それほど陽気というわけでもありません。というのも、シガー工場がまた一軒つぶれたからです。ここは、すばらしい所です。公けには人口、二万六千人ということになっていますが、現在の人口は一万人位です。駅のトイレには、わが穢れなき町に関して、鉛筆書きの落書きがしてあります。誰かが書いたのですが――「もし、この町が嫌いなら、出て行け、近寄るな」と。その下には、さらに誰かが付け加えて「みんな出ちまったさ」と。

（キー・ウエスト発――マックス・パーキンス宛
一九二八年四月二一日付）
――『ヘミングウェイ書簡集』より――

ケネディ国際空港にて

ニューヨークのケネディ国際空港の税関の検査は執拗だ。一人一人厳重に荷物のチェックがあり、ときには特別に検査官が呼び出され、荷物を全部、台の上に取り出して調べさえする。麻薬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の持ち込みに神経をとがらせているのだろう。さんざん待たされたあげく、いざぼくの番になると税関吏はカバンには目も向けない。日本人だからだろう。ただ滞在の目的と目的地を聞いただけだ。

「キー・ウエストです」

「ああ、あそこはいい所だ。私も昨年の冬、行ってきたんだが。ヘミングウェイの家がまだ残っているんだがね。知ってるか、作家のヘミングウェイさ」

「ええ、そのヘミングウェイの家が見たくて行くんです」

「そいつはいい。バーも残ってるんだ」

「スロッピー・ジョーですね」

「そう、スロッピー・ジョーズだ」

「ヘミングウェイの家には猫が一杯いたでしょう」

「わんさといたな」

「その猫を見に行くんです」

「……。ま、いい旅を。グッド・ラック」

税関吏は一瞬、妙な顔をしたが、満足な様子でもあった。

言わねばいいことを口走ってしまったが、本当のことだ。何年か前に、フロリダに冬の家をもつアメリカの友人がキー・ウエスト来訪の折、一冊の小冊子を送ってくれた。『ヘミングウェイの家』と題するキー・ウエストの屋敷と庭の写真を集めた薄い写真集である。そこにはまったく毛並みの違った猫が屋敷のいたるところに、ゆったりと、静かに、そして清潔な、明るい日差しのもとで、歩いたり、眠ったりしている姿が映し出されていた。

主人であるヘミングウェイは死に、猫の子孫だけが栄えている館というのが、何ともヘミング

ウェイらしい一つの世界を物語っているようで印象的であった。このキー・ウエストの家に限らず、キューバのハバナの郊外、フィンカ・ビヒアに移り住んだ後にもヘミングウェイの家には五〇匹を越える猫がいたと言う。

それだけではない。ヘミングウェイの小説にはいたる所に猫が忽然と姿を現すのだ。と、なるとヘミングウェイを単に猫好きだ、とだけ言って済ませてしまうわけにはいかない。ヘミングウェイの猫へのこだわりの中に何やら謎めいたものが感じられる。そこにはヘミングウェイ自身とヘミングウェイの文学との絡みが潜んでいるようにも思われてくるのだ。現実の生活でヘミングウェイに深く関わる「猫」がヘミングウェイの内部に、そして文学に隠されているように思われてくるのである。

キー・ウエストはそういう意味で、ヘミングウェイの影をとどめている所と言えるであろう。そして猫が居たというだけではない。『武器よさらば』から『誰がために鐘は鳴る』に至るまでの一三年間の、ヘミングウェイが作家として、またエッセイストとして、さらには再びジャーナリストとして、最も活動的な三〇歳代を過ごした家でもある。第三の妻となるマーサ・ゲルホーンとのスロッピー・ジョーズでの邂逅と二番目の妻、ポーリンとの結婚生活の破綻もある。また、新たな作家への転進を計った時期を過ごした地でもある。ヨーロッパを後にして、定住の地となったのが、このアメリカ最南端の小島であり、文明から隔絶され、スペイン風の雰囲気をとどめた異国情緒あふれる最果ての地であったのだ。

それまでガートルード・スタインやジェイムズ・ジョイスと親交を交わし、フィッツジェラルドやドス＝パソスと文学を語り、パリの文化に、あるいはカルチェ・ラタンの芸術的雰囲気に身を浸していたヘミングウェイが、文明と文化から遠く離れ、この地に根を生やし、生活を謳歌する土地の人びとと親しく交わり、彼らに魅せられ、海に心を奪われた地だ。金物商ほかさまざま

な店や工場を経営していた、土地の顔役チャールズ・トンプソン（『アフリカの緑の丘』で「カール」の名の下に登場）、近隣の海を知り尽くしていた釣り案内人兼船長のブラ・ソーンダーズ（短編「嵐の後に」のモデル）、そしてスロッピー・ジョーがいた。

それまで川釣りに興じていたヘミングウェイに、初めて海釣りの醍醐味を教えたのは彼らである。ほんの数日の滞在予定が、ポーリンの叔父、ガス・プファイファのプレゼント、フォードA型車の到着の遅れもあって六週間に延び、さらにポーリンのパトリック出産の後、再び島に舞い戻り、仮住まいのアパート暮らしから定住の家の購入に至る。後年キューバのハバナへの移住は、キー・ウエストの延長に過ぎない。いや、より辺境なる土地への回帰なのだ。それは幼少期を過ごした両親のもつ別荘の地、あのカナダとの国境に隣接するミシガン湖畔の大自然に包まれた夏の日々とどこか見えない糸で結ばれていたにちがいない。川での鱒釣りは、海でのカジキ釣りに変わる。

あの大海原で、一人、巨大なマカジキと闘い、広大なる海と空の空漠たる無限の宇宙と己れをみつめる『老人と海』のサンチャゴ老人は、海に魅せられたキー・ウエストでのヘミングウェイ自身の体験なくして生まれえなかったであろう。

海に浮かぶ島々

九時、マイアミ出発。フロリダ半島の東側を南北に走るインターステート・ハイウェイ95号線を南に、マイアミ・ビーチへ抜ける395号線のサインを横目に一路マイアミの町を抜ける。空港からモーテルへの道中、道の脇や小高い丘に林立する、すっきりと伸びきった幹のてっぺんにさわさわと緑の葉を茂らせた、シュロやヤシの木の南国の風情に圧倒された前日の思いも、一

日過ぎるとあたりまえの風景である。傍らの白い漆喰塗りの家並みを眼下に見、しばらくしてハイウェイはそのまま一般道路である国道一号線に変わり、道と並行して走る高架鉄道の駅には通勤客の姿も見える。中央分離帯にはピンクや白や黄色の花を付けた背丈の低い木々が芝生の中に点在する。熱帯の花は、ほとんど原色だ。気温が高いと花はどこでもけばけばしくなるのだろうか。

センサーにコントロールされているのであろう、無数にある信号は車の流れに沿って、青信号が続き、停まることがない。道の脇のガソリン・スタンドや車のディーラー店のひしめく町中を走り抜けると、両側には広い芝生の前庭があるこざっぱりした家々が続き、やがて道は中央分離帯もなくなり、狭くなる。家並は消え、ざわざわと生い茂った低い灌木の林が道の両側に広がる。やがて周囲は湿原に変わり、そこはかとなく海の香りが漂う。

出発してから二時間半。コーヒー一杯の朝食では、さすがに空腹を覚え、道路脇の「シーフード」の看板の下がる大衆的な感じのレストランの前で車を止め、サンドイッチを注文し、店の人に現在地を確かめる。「キー・ラーゴ島」ということである。マイアミがスペイン語圏の感じが強かったのに対して、ここは純然たるアメリカだ。いつのまにか、マイアミを抜け出し、フロリダ半島を出、キー・ウエストへと連なる、いわゆるフロリダ・キーズ（Florida Keys）と呼ばれる島々の最初の島にはいっていたのだ。そう言えば半時間ほど前に小さなコンクリートの橋を一つ渡ったが、それがおそらく半島と島を結ぶ橋だったのだろう。両脇にちらっと見えた海は一方が大西洋で、もう一方がメキシコ湾だったのだろうか。道は島の中央を通っていたためキー・ラーゴ島は半島の続きのようにしか思われなかったのだ。キー・ラーゴからヘミングウェイの家のあるキー・ウエストまでは約一一〇マイル、一八〇キロの距離である。

ヘミングウェイはこの道を一体、何度往復したことであろうか。ヘミングウェイが初めてこの

道を、途中フェリーに乗り継ぎながらキー・ウエストに向かって通ったのは一九二八年一一月末のことである。『日はまた昇る』の印税三七〇〇ドルを懐に、雑誌『スクリブナーズ』から連載物に一万ドルの稿料支払いの提示を受け、完成間近の『武器よさらば』の草稿を手に、生後五か月の息子パトリックと妻ポーリンを傍らに、ヘミングウェイはキー・ウエストへ向かった。二九歳の、若く希望に燃え、自信に満ちた時期のことである。

道は大西洋とメキシコ湾の間に無数に浮かぶ島々、フロリダ・キーズを結び、西に向かう。

フロリダ・キーズという名はフロリダ半島の南端からやや南に向いて西に、ほとんど一列に、ちょうど鶴のくちばしのように延びている島々の総称である。この群島は観光案内用の大まかな地図でも、名が明記された島は三〇を越え、小さな島まで数えたらおそらく百は優に越すであろう。Keyとは本来Quayすなわち「波止場」あるいは「桟橋」、「埠頭」の意に由来する。それが同音異語のkeyと綴りが変えられたということだが、群島そのものの形が鍵の形にも見えるから由来の真偽のほどは明らかではない。かつて、スペイン語で「ロス・マルティレス」(Los Martires)、すなわち「殉教者たち」と呼ばれていた島々である。深く静かなメキシコ湾から南に大西洋を望むと、遥か彼方の大洋に浮かぶ大小さまざまな島が複雑に絡み合い、もつれ合って、あたかも受難に苦しみ、悶える殉教者の群れのように見えたのであろう。

明確な記録に残されているフロリダの一部、北東部の群島の「発見」は一四九八年のセバスチャン・キャボットの探検によるが、一四九二年、コロンブスはバハマ諸島を出発し、キューバを求めて西に向かう途上、砂洲と珊瑚礁と小さな群島を見た、と書き留めており、コロンブスが目にしたのは、おそらくこの「ロス・マルティレス」であったであろう。フランス人のジャック・ル・モアンに記された一五六四年の地図には、地理的な正確さは欠くものの、フロリダ半島から南西に二列に並ぶ島々が描かれ、スペイン語源と同様、“Martyres”と明記されている。一六世

紀初頭から、約二五〇年にわたるスペイン統治からイギリス領に変わるのが一七六三年のことであり、群島はフロリダと共に長くスペインの支配下にあった土地である。

この半島と群島を結ぶ道路がキー・ウエストまで延長され、完成されたのは一九三八年のことである。北はカナダとの国境の町、メイン州フォート・ケントから南はアメリカ最南端の島、キー・ウエストまで全長三五〇〇キロメートルにもおよぶ国道一号の貫通である。フォート・ケントはかつてカナダのケベック地方を横断したとき通過したことがある。大きな針葉樹林帯の中にポツンと立っていた検問所のあった町であり、国道一号線の最北の地点に立ったときの感動が呼び起こされる。夏の日差しは樹林に吸い込まれるように涼しげで、やさしい。国境検問所とは言え、カナダとアメリカを隔てる検問所は形式的なもので、ただパスポートに入国の判を押すだけのことで、もしこちらで外国人であることを言い出さなければ何もせずに通過させてしまったであろう。

レストランでの朝食兼昼食は、昔コッペパンと称した大きなパンの優に二倍はある、潜水艦型をしたサブマリーンだ。それをコークで流し込み、再びハンドルを握る。イースターの休暇の真っ最中だから、とアメリカの友人たちは渋滞を懸念していたが、道はさほど混んではおらず、制限時速の五五マイルで走り続ける。キー・ラーゴ島はフロリダ・キーズの中では一番長い島だ。道程の五分の一ほどの長さである。マイアミに一番近いせいか、大衆向けの安っぽいモーテルやレストランが立ち並ぶ。

プランテーション・キー、ウィンドレイ・キー、イスラモラーダと続くこの島々は一九三五年九月一日から二日にかけての風速九〇メートルから一一〇メートルという記録的なハリケーンによって壊滅的な破壊を受け、多くの死傷者を出した地域である。当時、政府による退役軍人の再雇用が決定され、島の開発に彼らの多くが登用されており、いわば美談として新聞にも華々しく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com